

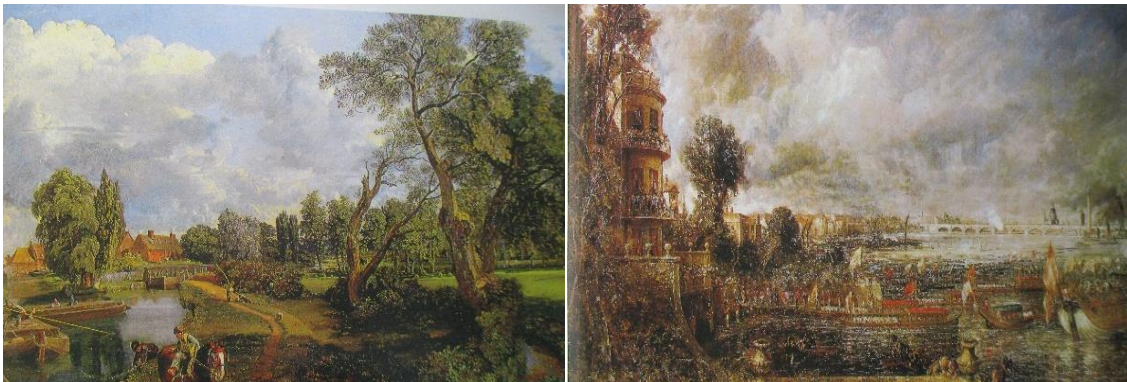
テート美術館所蔵 コンスタブル展

三菱一号館美術館（東京・丸の内） 2021.02.21～05.30

「ジョン・コンスタブル」(1776～1837)は、英国生まれで同時代の「ウィリアム・ターナー」とともに風景画家として19世紀に活躍し、新鮮な色彩と描写技法で生のままの姿を表現して豊かで美しい英国の自然風景を数多く描いている。

「ターナー」が各地を旅して国内外の景観の膨大な素描を残したことに対して、「コンスタブル」は、自らの生活や家庭環境に結びつく場所である故郷周辺の身近な風景を描き続けて全く対照的である。画伯の野外での制作を始めたことで、刻々と変化する光の効果を捉えた技法は印象派に先駆するものとされている。

本展は、世界有数の「コンスタブル」のコレクションを誇る英国・テート美術館の作品を中心に、身近な土地を描いた油彩画の初期から晩年の豊かな風景画の世界の紹介に加え、同時に「ターナー」の作品など「85点」が展示されている。



ジョン・コンスタブル《フラットフォードの製粉所》1817年 油彩/画布

画伯の故郷英国・フラットフォードの風景を描いた作品は、流れる雲の下に緑なす田園地帯は爽やかで美しく、緑や青を主とした寒色系の画面の中に置かれた製粉所のわずかな赤い壁色がアクセントとなり優しい情感を与えてくれる。

作品は、両親の手伝いであろうか、働く子供たちや足の太い従順そうな馬、遠景の人々、瑞々しい緑の木々や足元の草花などが実に丹念に描かれている。

本作品は、画伯の名声を確立する情景を描いた連作の先駆作品となった。

ジョン・コンスタブル《ウォータールー橋の開通》1817年 油彩/カンヴァス

画伯には珍しい都市の風景画は、ナポレオンの敗北2周年を記念して、ロンドン・ウォータールー橋の祭典が行われた様子を描いた作品である。構図はより低い地平線に挑み、広大な空と広い川が「セントポール大聖堂」の向こう側に向け、左側の壮大な雲や優雅な木はより抒情的で風景画の別格な例とされている。